

第38回区民車座集会意見交換内容（川崎区）

- 1 開催日時 平成30年10月31日（水） 午後6時30分から午後8時00分まで
- 2 場 所 かわさき障害者福祉施設たじま
- 3 参加者等 参加者11名、傍聴者39名 合計50名

<開会>

司会：定刻となりました。ただいまから第38回区民車座集会を開会します。

私は、本日の司会を務めます川崎区役所企画課金井と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

さて、本日の車座集会ですが、「こども食堂を通じた、人がつながる地域の居場所づくり」をテーマといたしました。既にこども食堂の運営ノウハウを持つ団体の皆様と、これからこども食堂を始めようとしている団体の皆様の取組発表をもとにした意見交換により、子供の居場所ですとか、あるいは子供たちのための新たな活動の広がり、あるいは団体同士のネットワークが生まれる、そんなことを狙いとして本日の車座集会を開催してまいります。

本日は、初めに、既に本格的な取組を進めている団体から、たじま家庭支援センターてんとう虫ハウスさん、それから桜本こども食堂さん、大家族ふるさと食堂の皆様を取組を発表をいただいた後、3団体の活動に対して市長から感想をいただきます。

次に、これから本格的な活動を始めようと取組を進めている団体から、大師第1地区社会福祉協議会、中央第2地区社会福祉協議会の2団体の皆さんを取組発表をいただき、その後、全ての団体の発表を踏まえて、全体で市長との意見交換を行います。

それでは、行政の出席者を紹介させていただきます。

福田紀彦川崎市長でございます。

市長：どうぞよろしくお願いいたします。

司会：水谷吉孝川崎区長でございます。

区長：よろしくお願いいたします。

司会：それでは、福田市長から御挨拶申し上げます。市長、よろしくお願いいたします。

<市長挨拶>

市長：皆さん、こんにちは。第38回の車座集会にお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

今日は傍聴の方がものすごく多いですね。なかなか珍しい車座集会になっていると思います。

38回やっていますが、川崎区では、もう7巡目*ということで、毎回テーマを変えてということでやらせていただいておりますけれども、今日はこども食堂で既にやっていただいている、取り組んでいただいている3団体の皆さんと、これからというところなんですけれども、私も、この車座に先立って、桜本さんのところには行けなかったんですけども、二つのところには事前にお邪魔して、あと、北部のほうで、高津区のほうでやっているこども食堂も見学させていただいたりして、どういうふうに行っているのかなというのをちょっと自分の感覚でも見たいという部分がありましたので行ってきました。

今日は有意義な意見交換ができますように、皆さんに御協力いただければと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。（* 正しくは、6巡目です。）

司会：市長、ありがとうございました。

<取組紹介>

司会： それでは、最初の取組発表ということで、本日の会場でもございます、たじま家庭支援センターでんとう虫ハウスさんの取組でございます。

それでは、てんとう虫ハウスの江良様、島津様、前のほうで発表をよろしく願いいたします。

江良さん： では、よろしく願いいたします。江良と島津です。あともう一人、大田という職員がおりますので、よろしく願いいたします。では、着席させていただきます。

田島の共生食堂ということで、最初、私、こども食堂というネーミングが全然分からなくて、言うてしまふと思いつきで始めたような感じでございます。名前がこども食堂といいますと、どうしても貧困家庭、あそこに行っている子はという指さしをされたくないという思いがございましたので、子供と一生懸命考えて、何にしようかなというふうに考えましたら、てんとう虫ラッキーセブン、幸運を呼ぶ虫だよ、僕たちでしよう、私たちでしよう、職員さんでしよう、ボランティアさんでしよう、いろいろ出てきて、えっ、ちょうど七つになったねということで、じゃあてんとう虫ハウスにしようということでネーミングをしました。今、こども食堂といっても、子供たちはふーん、何それという形なんですけども、てんとう虫ハウスという、あ、そうそう、ご飯食べるころ、遊べるころ。楽しい居場所づくりとか、楽しく遊べるころだというふうイメージをしております。

私どもとしましては、市のほうから、本来の業務としましては障害者の生活支援と地域交流というのを委託されておまして、簡単に言うてしまいますと、相談支援、幼児から高齢者、障害者、全て家庭をターゲットにした相談支援を行っております。また、地域交流としましては、今日、皆様おいでいただいております地域交流スペースと3階にも会議室がございますので、今日もお越しの中でこちらを活用していただいている団体さんがございますけれども、そちらを使っていただくことで、地域の方々からいろんなつぶやきを、例えば9月、10月ですとお祭りがあるよとか、こんな集いがあります、またはちょっとお隣の高齢者が気になりますよなんていうつぶやきをいただくために、この地域交流スペースと会議室を活用していただいております。あと、こちらに活用していただいている団体には、私ども生活介護という障害者の方々のお通いの場所を提供しておりますので、そういう方々とも交流をしていただきたいということでお貸し出しをしております。ということで、相談支援が事業の中心になってきております。

それで、こども食堂を考えたまっかけなんですけども、これにつきましては、今日もお越しの方がおいでになりますけども、渡田小学校と大島小学校のほうで寺子屋事業をされておまして、そこにお声がけをさせていただいて、子供たちにちょっとアンケートをとりましたら、やっぱりお父さんお母さんが働いていて帰ってくるのが遅いんだよ。じゃあ、夏休みどうしているのと言うと、500円もらって妹とおにぎりを五つ買って、それでお昼と晩を過ごしている。じゃあ、給食がないと大変だよねと言ったら、うん、給食ないとおなか減っちゃうんだよというようなことで、あと、やっぱりお友達は塾に行っちゃっているし、わくわくにも行っている子もいるけども、僕たち近くの公園で2人きりで遊んでいるんだよなんて声を聞いたものですから、じゃあ何とか安心していただける居場所づくりをどうにかできないのか。それと、あとは子供たち自身が自分たちで調理をすることを覚えてもらって、少ない時間で簡単にできる調理がないかなというふう思ったときに、これはカレーだというふうに思いまして、そのお話を地域の民生委員さんを含めてお話をしましたら、うちには畑をやっているからジャガイモ、ニンジン、タマネギ持っていきなつて、ごっそりと持ってきていただいたりしましたし、ということで、こども食堂をやってみようかなというようなことを考えました。

それで、実際には私どもは平成28年4月からたじま家庭支援センターをオープンしたんですけれども、私どもの思いつきは、5月ぐらいにそれを思いついたもので、じゃあどうしようかと言いましたら、今日もおいでいただいていますけども、区役所の森田さんに相談して、こそっと相談したんですけれども、そのこそっとが大きくなりまして、じゃあやるためには、やはりきちっと衛生管理をしなければいけません、また、広報についても、いろんな広報の場所がありますよということを教えていただいて、私も食品衛生責任者、何だろうなと思いましたが、半日頑張りましたら取れました。それと、地域への挨拶、チラシにつきましても、田島地区町会長様を含めて、あと民生委員様、主任児童委員様を含めて、広報をさせていただきました。それと、広報はしましたけれども、やっぱり子供の力というのは強いんですね。子供が子供を呼んできまして、あそこへ行けば遊べるよ、あそこへ行けば御飯をたっぷり食べられるよということで、子供同士が声をかけ合って集まってきたような形になりました。

あと、私も体力的に自信がない年齢になってきましたので、夏休みの期間始めるに当たりまして、市立川崎高校の福祉科の方にお声がけをしましたら、気持ち良く協力をしていただけまして、本当に3時間、4時間、一緒に子供と駆けずり回っていただきました。ということで、異年齢交流もできるんだなということを改めて感じさせていただきました。

あと、食材の提供もそうですが、メニューがカレーだったんですけれども、私も五、六人程度のカレーはつくったことがあるんですけれども、何十人分のカレーはつくったことがなかったので、お隣の老人いこの家に御相談しましたら、月に1回のカレーの会食会をしております、婦人部の会長さんから是非レシピを提供するので持っていきなさいと言われてまして、いただいてということで、始まっていきました。

これが28年8月8日と10日に開催をしました。開催するに当たって調理の自信がなかったので、食生活改善委員さん、ヘルスメイトさんに御協力をいただきました。また、初めてタマネギ、ニンジンを切ったりする、手をけがしないように猫の手だよと言ったら、ちゃんと猫の手で切ることができて、最後につくったカレーをみんなで食べて、どこのカレーが一番おいしかったと聞いたら、ここのカレー、給食のカレーじゃないのと言ったら、いやここのということで、後で聞いてみましたが、夏休みの期間、うちの方とカレーをつくったよなんていう声も聞かれて、非常に良かったです。

そのことを受けて、じゃあ定期的にこども食堂を開催しようということで、開催しました。平成28年度は年度途中でしたけども10回開催しまして、252名の子供に参加いただきました。29年度に関しましては、16回開催しまして、あと1人いけば500名だったんですけど、499名御参加をいただきまして、今年度、9月までですけれども、252名の子供たちに参加をしていただいているような状況でございます。

あと、当初のきっかけが、28年8月に始めたときに、大きくチラシに夏休みの宿題を持ってきてくださいというふうに保護者宛にお手紙を書いたんですけれども、誰一人持ってきませんでした。見事に裏切られました。ということで、2回開催する中で、ちょうど今年の春休みですね、花見に行きましょうということで、子供たちとおにぎらずをつくって、みそ汁を持って近くの公園に行って、少し時間があつたものから、じゃあ、試しにちょっとだけ勉強してみようかなと言って、壁に向かって勉強し始めましたら、1時間10分ぐらい頑張って勉強したんですよ。すごいなと思ってですね。でも、掛け算するのに指を使いまして、これ以上大きくなっちゃうと分からなくなっちゃっているということも改めて発見をしまして、これはやっぱり少し学習支援も当初の目的のように入れなければいけないのかなというふうに考えまして、保護者の方にアンケートをとりましたら、見事に学習支援をお願いしますというふうに言われてまして、私ども3人職員がいるんですけれども、教え方を含めて学ばなければいけないなということで、テキストを買ったりして、やっと11月、来月から学習支援をこども食堂の合間ということで始めることにさせていただきました。

こども食堂から見えてきた課題としまして、これはこども食堂が始まって3期目を迎えるというふうに言われています。1期目は居場所づくりだったりですか、活動場所ですね。2期目がやはりお金の担保とボ

ランティアさんの担保が難しい。3期目は何かと言われますと、やはり食中毒であったりとか、けがや事故のことで、保険をきちっと掛けておかなければいけないということで、保険にも入らせていただいております。それで、保険料もばかにならないものですので、こども食堂安心・安全プロジェクトにエントリーしまして、年間1万円なんですけれども、3年分、こども食堂の保険に充ててくださいということで頂戴をさせていただきます。

あとは、本当にお声をかけましたら、今日もたまたま、去年、お米をいただきましたサンケミカルさんという会社があるんですけども、今日もちょうどこのタイミングに合わせてお米をお持ちいただきました。新米です。あと食材で、やっぱりどうしても子供には季節感のある野菜を食べてほしいということがありましたので、これも南部市場にあります鴨居さんという青果店があるんですけども、そこから毎回本当に新鮮な食材を提供していただいています。

このように、やはり地域の方々に支えられて、本当にこども食堂が展開しているかなと思いますし、始めた限りは、やめるわけにはいかないの、細く長くと思っていますし、今日もうちの理事長が来ていただいておりますけども、地域に還元しなさいということで、多少のお金、大分大きなお金ですけども、補助をいただいているようなことでございます。

こども食堂への思いとしまして、やはり私ども相談支援をしているものですから、やはりこどもの話、保護者の話を十分に聞いて、適切な相談支援につないでいくということが求められておりますし、やはり異年齢の子供同士の遊びの中で、お兄ちゃんお姉ちゃんが小さい子の面倒を見るとかということで、お互いが楽しみにできるような場所、これを継続的にしていきたいということと、あと、今日はせっかくお集まりをいただいて、本当にこれは1年前から言っていたんですけども、区内、また近隣の区で活用されていますこども食堂の方々と是非連携をとり合って、情報交換を密にしながら、地域づくりを目指していきたいなというふうに考えているところでございます。

これは私が一番好きな写真なんですけども、3月に花見に行ったときの写真なんです。子供たちに花見をしたことがありますかと聞きましたら、ないという子供がほとんどでした。あとは、その横は調理をしている場面と、この右下でございます、皆さん、これが勉強をしているところです。1時間10分勉強したんです、子供たちがね。ここにもすごびっくりをしました。3カ月に一度、「てんとう虫ハウス新聞」のほうを発行させていただいております。

ということで、皆様、今日お集まりの方を含めてそうですけども、こども食堂を展開されている方々と本当に手をつないで、本当に「我が事・丸ごと」といっても何事かというふうに思われてしまうと思うんですけども、小さな輪をつないでいながら地域づくりをできたらなというふうに考えてございます。

本当はちょっと事例も紹介しようと思いましたが、時間が超過しましたので、御清聴のほどありがとうございます。また忌憚のない御意見を頂戴できればと思っております。ありがとうございます。

(拍手)

司会：江良さん、島津さん、どうもありがとうございました。

それでは、続きまして桜本こども食堂の取組です。鈴木さん、金さん、よろしく願いいたします。

鈴木さん：はじめまして、社会福祉法人青丘社の鈴木健と申します。

金さん：同じく、金恵玉と申します。今日はよろしく願いいたします。

鈴木さん：最初は私のほうから、私、鈴木健と申しますが、簡単に、桜本にあります川崎市ふれあい館・桜

本こども文化センターというところで働いているんですね。こども文化センター・ふれあい館では、日々、たくさんの子供が来ます。子供たちが楽しそうに遊んでいる姿があります。そして、時には子供たちは本当にもう辛いよ、悲しいよ、生きるのしんどいよという姿にも接することがあります。

ただ、今日は実はハロウィーンの日ですね。ここ4年ぐらい、桜本で子供たちを集めて商店街でハロウィーンのパレードをやっているんですね。今日、ちょうどこの姿で、頭にアフロのかつらをかぶりながらハロウィーンをやってきて、子供たちは大体200人ぐらい集まって、年々、年々、商店街の人たちとか盛り上がって、商店街の方が音楽をかけてくださったり、いろんなお店の方がお菓子を用意してくださったり、商店街の高齢者のデイサービスの方々も、うちの施設も寄っていったということで、子供たちとデイサービスの中を回ったりとかしていった、子供たちは本当に楽しいと同時に、やはり子供たちの力ってすごいですよね。こんなにも地域が子供たちの力によって元気になるんだという姿を、今日とても味わってきました。

ということで、桜本のこども食堂のほうの紹介からまずスタートをしたいと思います。

金さん：今日はとてもうれしく思います。私は金恵玉という者で、在日コリアンです。

今日、子供たちの話が、ハロウィーンの話が紹介されたんですけども、日常、こういった子供たちや若者たちと出会ってきたということを私たちは現場の中で経験を積み、そういうふうに出会ってきたということなんです。それで、こども食堂を実は2016年の6月にやろうというふうに立ち上げることになったんですけども、それに至るまで1年ほど、私、個人的には1年ほど前から、個人的にやれたらいいなと思っていました。そう言って、ちょっと言葉を、こども食堂やりたいと言ったことをきっかけに、僕も私もという形で、じゃあやろうというふうなことで、2カ月でぱぱっと決まったんですね。ノウハウも何もありませんでした。初めて2016年の6月からやろうとあって、その年の8月にプレオープンをしました。それ以降、私たちが3週間に1回なんですけれども、今に至るまで継続することができています。そのこども食堂のことを紹介していきたいと思います。

私たちがとても大切にしていることはこれです。「いっしょにごはんを食べようよ！」です。これに至っては、そうですね、いろんなこども食堂、貧困の家庭だったりとかって、貧困のということ言われてきたことがたくさんあったんですけども、やっぱり私たちのスタンスは、どんな人もみんな集まって「いっしょにごはんを食べようよ！」というスタンスで、今も昔も、ずっとこのスタンスを忘れないで続けていきたいというふうに思っています。そして、地域の中でつながって、一人一人が生きる力を得ていくことができる、そういった居場所のこども食堂を目指します。

それで、これは私たち桜本こども食堂が大切にしていること。今も申しましたように、「いっしょにごはんを食べようよ！」です。子供たち含めて、そのバックグラウンドの家庭のママたちも元気にならないと、子供は、なかなかやっぱり生きていく生活の基盤というのが保てないんですね。一緒に御飯を1食食べるということが、私たちにとってはとても大切で、生きていく力になっていくというふうに信じています。そして、ママも子供たちと一緒に、子供と一緒に御飯を食べるということができること。一つの家じゃなくて、みんなと食べるということで、お互いにエネルギーをもらったり、元気をもらえたりする環境が今あることを実感します。お待ちしておりますと子供たちにメッセージを送っています。

そして、桜本こども食堂の運営のポイントなんですけれども、下に、これチラシなんです。これは歴代と言ったらあれなんですけど、最初からこういうふうにしてチラシをつくってきました。今は、こんなチラシをつくっているんですけども、これは障害を持った働く仲間たちがつくってくれたチラシなんです。これを今地域の中に配布してくださっているのは、地域で働く障害を持つ仲間たちが商店街の中で1枚ずつチラシを配ります。そういった彼らがしっかりとこども食堂の見えない部分を支えてくださっています。大切にするところは、やはり若者、居場所がない若者たちもたくさんいます、生きる希望を失っている若者たちもいるんですね。そういった若者たち、障害がある方たち、そして地域のボランティアの連携を大切にする

ということを大切にしています。

そしてもう一つですね、地域活動支援センターで働く私どもの法人の中には、地域活動支援センターという拠点が3店舗あります。そこで働く精神、身体、それから知的、そして手帳を持たない方たちを含む、そういった彼らの居場所づくりをしているところがあります。そういった方たちが社会参加を目的とする取組としてのこども食堂です。そしてまた、先ほども申しましたように、地域の若者を通して、地域の施設や桜本こども文化センター・ふれあい館、わくわくプラザとの連携を図っております。また、チラシ作成、配布を通して、地域の小学校や保育園、商店街、町内会への宣伝と告知をしています。立ち上げをする際には、近隣の学校の先生に挨拶回りをしたり、民生委員の方にボランティアを募っていただいたり、またはわくわくプラザで連携をしていただいて、子供たちにチラシを配布して下さったり、また、法人の抱えている保育園等などでも案内をしていただいたりというふうにして、宣伝をしてきました。その宣伝をつなぐのは、いつも主役は障害を持つ仲間だったり、また、わくわくプラザで働く子供との顔の関係のできている若者だったりしています。

あと、もう一つは、見えない部分を支えてくださっているボランティアですね。ボランティアの皆さんの会議の定例化を目指しています。まず、これにはまだまだ課題があるんですけども、とても大切な交流だというふうに思っていて、意見交換とつながりをこれからも密にしていけたらいいかな。そして、それぞれ考え方や思いは違いますけれども、それでも一つの目標を持って、思いの共有化を図っていくということを目指しながら定例化を図り、時にはオフ会などを開いて親近感を深めていきたいかなというふうに思っています。そのときを通じながら情報発信も私たちはしっかりしていけたらいいなというふうに思っています。

というわけで、今に至るまでに、3週間に1回ということで、時には夏は2回、春先は2回、クリスマスのおときには2回、とかというふうに告知をしながら、ポスターをつくって、チラシを配って御案内しています。

これが私たちのこども食堂の食事づくりの風景なんですね。外国にルーツがある子供たちや家族が私たちの桜本には大勢います。私自身も在日コリアンなんですけれども、こうやって家庭の中で食べてきた食べ物というのは、私にとってもそうです。当たり前のようなもので、私たちの命と体をつくって、心の衛生、精神衛生もそうですね、つくってくださいましたね。そういうことを大切にしながら、私たちのメニューも、これ、キムチなんですね。手づくりのキムチをつくって、ビビンパというメニューの中に一緒に積み足します。または、これはルンピャンなんですけれども、フィリピンの春巻きをママにレシピを教えてもらいながら一緒に巻きます。そして、ソパスという子供たちが慣れ親しんだフィリピンのおいしいスープなども献立に入れて、皆さんと一緒に分かち合います。

先ほどのお話にもあったんですけども、本当にこども食堂、たくさんの人に支えられているんですね。市場の鴨居さんのほうからは、私どもにもおいしい新鮮な野菜が届くんですね。本当に感謝です。実は、うち、子供たちがたくさん集まるんです。こども食堂は赤字、増えれば増えるほど赤字なんです。野菜がこうやって提供されるということは、本当に運営の中でもとても助かると思います。それ以外にも、青森のほうから届けられる無農薬のお米、脱サラをして農家をしてお米をつくるようになりましたよという方が届けてくださるんですね。この米ですね。ちょっと色は真っ白じゃないんですけども、精米したてのお米で、実は食べると甘味があってとてもおいしいですね。あと、大根とかもそうです。

ここにちょうど「さくらもとこどもしょくどう」という看板があるんですけど、実は、もともと私たち桜本こども食堂立ち上げのときには、小さなコミュニティカフェ、ほっとカフェというところでやっていたんです。そこは大体25名ぐらいのお子さんたちが入るんですけども、実は人数が増えたんですね。25人の子供たちが何回回れば子供たちを受け入れることができるだろうということで、どんどん子供が増えていて、最初は20人から40人、60人、80人、90人、今は時々本当に100人を超えるときがあって、

前回の10月25日は子供だけで129名集まったんです。大人も保護者の方も数えると35名で、164名だったんですね。いつもは大体180人分のご飯を準備します。でも、この日は、10月はお魚だったので、ちょっと子供たち来るのは少ないかもと思って、ちょっと少な目の材料を準備しました。やっぱり全然足りなくなっちゃったんですね。なので、こういったこともありまして、実は2018年、今年の5月に移転をしました。移転はどこにしたかという、ほっとカフェから桜本保育園の地域交流室を借りて、ここのところでこども食堂を開設するようになりました。保育園の業務をしていますから、保育園の業務に支障を来さないように、実はこれ、勝手口の横の入り口をこども食堂専用にして、こども食堂をオープンしています。こども食堂のこういった立て看板も手作りです。そして、たくさん集まる子供たちは自転車に乗ってくるので、自転車は、そうですね、60台から70台、地域の人たちと連携をしながら、駐輪場を確保しています。そのときに、危険ですよここに自転車をとめてくださいというふうに、必ず人が立って安全確保をしてくださっています。そういうように、たくさんの方たちの見えない力をお借りすることによってこども食堂は運営されています。

これがこども食堂の風景です。実はホールを担当するのが若者なんですね。子供、若者というのは、これからまたちょっと説明をさせていただくんですけども、彼らが子供をつないでくださっている。いつも食卓には彼らがそろって、いろんな話を聞いてくれている。そして、子供たちが食べるのをずっと見守りながら、子供たちが帰るまで、そして帰りが遅くなる方には、この彼らがお家まで送り届けたりというふうなことを愛情いっぱいやっているんですね。

また、これは地域活動支援センター、先ほど紹介しました障害を持っている彼らが働いている拠点なんですね。こういった彼らが、こども食堂という、子供が真ん中にある場所に、彼らが社会参加をする機会が与えられることによって相互関係が成り立っています。こども食堂は一石二鳥どころではなくて、いろんな人にとっての居場所になっているんだということを思います。

まだ、後は続くんですけども、ちょっとバトンタッチしたいと思います。

司会：では、ややまとめぎみでお願いいたします。

鈴木さん：こういう地域の力、地域と連携してのこども食堂、大体、数週間に1回ぐらいが限界なんですよ。じゃあ子供たちの日常の居場所をどうしていくかということ、子供たちの日常の居場所との連携ですよ。私たちはこども文化センター・ふれあい館、わくわくプラザと一緒にこども食堂を運営していることによって、子供たちが来やすい環境づくりをしています。その中で、幾つか子供の居場所づくりを御紹介したいと思います。

小学生ですかね、夏休みの間、小学生の夏の夜のプログラムをやっています。多文化こどもハロハロクラブというのをやっています。中学生の学習サポートというのもやっています。そして、市立川崎高校の定時制では、ぼちっとカフェという、高校の中でカフェをやって、高校生の居場所づくりなどもやっています。そして、地域の中でこういった若者たちの音楽活動、文化活動もやっています。こういう小学生、中学生、高校生の日頃からの居場所づくりがベースになって、その中で育ってきた子供たちが、またこども食堂で地域の子供たちとともにあるという、そういった展開をしています。

以上で終わりにさせていただきます。どうもありがとうございました。

(拍手)

司会：ありがとうございました。鈴木さん、金さん、ちょっと急かしてしまって申し訳ございませんでした。

それでは、続いては大家族ふるさと食堂の取組ですが、実は大家族ふるさと食堂は昨日開かれておりまし

て、そのときの映像を大体1分ぐらいなんですけど、流していただいてから発表にします。

それでは、映像をお願いいたします。

(映像)

司会：それでは、発表に移ります。「大家族ふるさと食堂」、黒江様、小林様、お願いいたします。

黒江さん：ハッピーハロウィーン、ハッピーハロウィーン。いらっしゃいませ。地域のリビング、大家族ふるさと食堂へ。私たちはこうやって始めています。

私は、今日のプレゼンター、黒江です。

私たちのプロジェクトの三本柱なんですけど、その一本、真樹ちゃん、ハッピーハロウィーン、それから五十嵐のおっちゃん、幸区から来てくれました。ありがとうございます。

それでは、始めましょう。皆さん楽しんでください。

どこでやっているの、ここです。ベトナム料理の店です。場所は幸区中幸町1-52、いなげやさんとか、新岩城さんとか、横浜銀行のそばです。

いつやっている、定期開催しています。お店の定休日を使って火曜日、最終週の火曜日18時から19時半。しかしながら、皆さん帰るのはもう9時ごろです。きっと楽しいんだと思うんですね。

定休日にやることと定期的にやることは、やはり皆さん覚えやすいし、うちの店としても大変ありがたいことです。定休日に賑わいができますので。

地域といいますと、地域のリビングだから、どこら辺をターゲットにしているかということ、地域的には多摩川沿い、南河原、それから川崎の駅前地区、線路を越えています。というのは、私が運営しているJDSスクールという、そこから子供たちもたくさん来てくれています。その界限にいる子たちを、私の主人、そこにいますけど、主人の車に乗って、何回か輸送式にして、三、四回往復して運んでいます。あとは、元気な子はチャリンコを転がして線路の下を通ってきます。でも、メインには幸町小、南河原小、南河原中学、この辺をターゲットにしております。

料金設定ですね。子供は無料、そして大人は500円。これが決め事です。店舗は19坪、客席数25席から30席。テーブルを囲むコミュニティスタイルにしています。大皿料理をテーブルで囲んでいます。最初はバイキングスタイルにしたんですけど、これでは交流ができなかったんです。途中から子供たちは紙芝居、ミニ卓球など、五十嵐のおっちゃんが相手をしてくださっている間に、お母さんは手が空きますので、その間にママ友のコミュニケーションとか大人同士の情報交換をしています。

こんな感じです。

助成状況ですが、ゼロベースで始めました。何の助成ありません。やってみようということで、半年間試してデータをためました。そして、第1期、第2期、第3期、第4期と私呼んでいるんですけど、5回ずつに区切って、チラシもどんどんどんどん何か明るい感じになってきているんですね。そして、かわさき市民しきんというところから、1年の5万円の基金がおりました。月にすると4,166円。これをいろいろとお皿を買ったりとか、子供用のフォーク・ナイフを買ったりとか、または光熱費ですね、こういったところに充当してもらっています。

これは参加者数です。小さい店なので、精一杯入って、今年の5月、68人に達成しました。そして、最初は41人ですね。これ、雪の日の次の日は16人しか来なくて、この日はもう帰ってちょっと泣きました。そして、上がったら、上がったら、また下がった。今年の夏はすごい暑かったのと、9月、これは福田市長もいらっしゃってくれたんだけど、大雨で、もう台風の状況でありましたけど、一応お店は開いて、45人集まりました。次59人、昨日、おかげ様で少し気持ちが楽になったところです。

これは大人、子供の比率です。ボランティアさんが今安定的に14人集まったんですね。子供は最高多かった33人、さっきのすごい多いときです。ボランティアが11人でこの人数をこなしたんですね。もうへろへろで、次の日はマッサージに通ったというような状況でした。そして、ここは今安定しています。だから、親子で来ているのがこれで分かるんですね。親子組が増えて、大人がこういうふうになっているんです。

さあ、じゃあこども食堂なのに大人はどうだということ、後でちょっと話しますけど、これは子供の就学状況。未就学児が多いんです。やっぱりお母さんと来ているんですね。お父さんとも来ていますよ。あと、小学生ですね。

これで私ちょっと計算してみたんですけど、大人の総数、これは500円ですから、トータル収入が出ます。これは先月まで、300円と子供の食費を仮定したところ、子供の総数を掛けて、やっぱり子供の食費のトータルが出ます。全員トータルから子供の食費を引いて大人の食費が出ますので、今度、大人の食費で大人の総数で割ってみるんです。大人の食費を大人の総数で割ると290というのが出ました。想定した300に値しているんですね。ということは何かというと、言いたいことは、私が考えたことなんですけど、大人364人の食事代が子供255人の食費を補っているということがわかった。すごいじゃないですか。7対10の法則ができました。そして、大人10人が500円出せば7人の子供が無料で食べられるんだという、これが6カ月やって、そして1年半にやったデータから出たものです。まずアクションを起こした、そしてやりながら結果を出していった、それが大家族ふるさと食堂の体質です。

それから、食材の提供なんですけど、最初はもう、うちの店のフードロス対策、それから北部の農家さん、あとは近隣の新岩城のおいしいどら焼きなど、近隣の方の差し入れです。なぜか第3期からコープさんからお米が届き、そしてなぜか次の第4期、隣のあつぶるの介護施設からたんぱく質源である肉が届きました。なぜでしょう。私が肉がないと叫びました。肉を食べさせてやってください。そしたら、セレモニアですから分かりますよね。お通夜とかで、ああいうのでやっている冷凍食品、ぎりぎりのもの、これもやっぱりフードロス、持ってきますよと持ってきてくださっています。こんな感じで、皆さん笑顔で食材を届けてくれています。

三本柱、私たちのこれがプロジェクトの基本になっています。五十嵐のおっちゃん、和太鼓の先生で、幸区教育会議のメンバーです。真樹ちゃん、これはエステシャンであり女優ですよ。女優さんです。女優なんです。それから、私はダンサーです。そして、レストランのママをやっています。この3人が、3人とも、結局、あら気がついたら芸術家だったのねということで、文化交流とかで知り合っていたわけですね。

次ですね。こんなふうになったらいいなというので、私たちのビジョン、語り合いました。真樹ちゃん、みんなが幸せな気持ちになって、大家族のように食事ができて、ママたちが歓談できる場が欲しい。五十嵐のおっちゃん、子供が生き生き活動する場所、場所づくりですね、いじめとかひきこもりがないような、そういう楽しい場所。まずは腹いっぱい食べようよ。それから、ノリちゃん、あのあたりは夜になると真っ暗なんです、客が全然来ない、うちのレストランが賑やかになって、そうすると地域も明るくなるだろうな。そして店で余った食材も有効利用できるし。ほぼほぼ、私がこの店を開いたとき、私のことを皆さんベトナム人だと思いました。私は日本人なんです。本当ですよ。そして、日本人である私と地域がどうやってつながり合ったらいいかなどとちょうど考えているときだったんです。

それで3人のビジョンがつながって一つになりました。よし、子供の食堂というか、地域食堂ですよ、やってみようじゃないか。そして、真樹ちゃんは受付とか会計、おっちゃんは人集めとかボランティア集め、宣伝、私は食材とかメニューをつくったりとか、そういう役割分担をはっきりしました。

私たちのこれはちょっとOurビジョンなんですけど、生活者主体、自分たち主体でとにかくやっつけようじゃないかと。ここに私たちがいます。対象者は、もう幅広く、そこに中核の触れなければならない問題の核がありますが、ここには直撃しません。ここを広く、幅広くとって、とにかくボランティアも500円払ってご飯を食べているんです。ボランティアも大人ですから、500円ぐらい払えるでしょう。とにかくみんな

なここは一緒なんだよ。そしてこっちは、協働者とは、協働の農家の方とか、現物支給してくれている、そういうあっぷるさんみたいな介護施設、私たちもできるときはお買い物しましょう。あっぷるに行って何か余興をやっておばあちゃんたち喜ばせましょうと、そういう協働をやっておウィンウィンを目指しています。

私たちのヒアリングは、三芳おなかま食堂という、埼玉県入間郡、ここまで真樹ちゃんに行きましたね。それでお勉強してきました。その次、協力者の増やし方は、1人が1人連れてくればいい。1人が2人連れてきたらいい。またその人が連れてくればいい。余りいい感じしませんね。ネズミ講みたいですけど、それでどんどん増やしていけど。どんどんどんどん増やしていけば、これ、きっと人材が増えてくるよというやり方をしました。シニアから若い人まで、何だか知らないけど集まってきた。近所のおじさんが掃除道具を持って掃除してくれるようになった。お店もきれいになってうれしいです。

ここまでの食堂のことですが、私が何でこんなことをやり始めたか、ちょっと深掘りさせてください。

恥ずかしいんですけど、私です。私は、これは本当に私です。99%。若いころニューヨークにいて、踊ることだけです。今は川崎ブレイクダンスはやっていますが、ちょうどそのあたりに行っていました。ブロンクスとかも闊歩していました。ただ、いつもおなかですいていました。本当にお金がなくて、御飯を食べられないで、ホットドック1個とかピザ1枚で1日過ごした思い出があります。ただ券を、並んで配布されているただ券で食べたりもしました。そして、これでアーティスト魂ができましたね。私は今こうやって子供たちにダンス、またシニアにもダンスを教えています。毎日がこんなものなんです。そしてアート、さっき言った五十嵐さん、そして真樹ちゃん、私たち、アートって何だろうって。アートって、貢献の精神とか、人を喜ばせなきゃいけないと思うんですね。自己充足のアートもありますけれど、コンテンポラリーとか、だけど、やっぱり原点、踊りとか歌とかもみんな人を喜ばせるものだと思って、人の幸せと寄り添う気持ち、これを自分は持ち続けたいなと思い始めました。

そして、またさらに大きな転換のきっかけが、ベトナムの学生たちを支援し始めたことです。これはベトナムの学校なんですけど、すごい食育で、みんな農家の子なんです。これは先生ですけど、先生と生徒がこうやって楽しく作っている。いいな、こんな学校なんて思っただけで帰ってきました。

私は、ダンスするよと言うと、学生は5人しか来ない。御飯食べるよと言うと20人。お酒飲むよと言うと、きっとみんなおじさんが100人ぐらい集まっちゃうと。やっぱり食べたり飲んだりするって幸せな気分になるんだなというのが分かって、何とこの深みにはまり、ベトナムの学生たちとレストランを始めちゃいました。これが始まりなんです。

もう一つ、私も実は孤食児童だったんだと思うんですよね。真樹ちゃんもそうだったよね。パンフレットに書いてある。私の母は臨港中学校で事務員でした。父は玉川中学校の教頭だったんです。いつも家へ帰ると、父も母も教育者なんだけど、私の教育なんか放っぼって、たったひとりぼっちでインスタントラーメンを食べたときもありました。こんな生活していました。その母が亡くなって、私はちょっとやる気をなくして、もうこんな状態になったんですけど、こんなことじゃ駄目だぞ、駄目だぞ、母の声が聞こえたんです。生活者として主体的に生きてみようじゃないか、踊ってもいいんだけど、グローバル文化、こんな格好いい名前のものをちょっと作って地域で活動してみようじゃないかと思うようになりました。

今、区役所と、こういう外国の方々との取組もやっていて、ダナンでこども食堂をやってみました。ダナンでこども食堂をやったんですけど、たくさん来ましたよ。ここは家族の食堂と書いてあるんです。ベトナム語で。ただ、本当にじいちゃんばあちゃんが孫を連れてきて、川崎の、申し訳ないですけどブースを借りてやっちゃったんですけど、海外だからいいやと思ってやっちゃったんですけど、うちは横浜市より早く完売しましたよ。すごい、もう、何を売ったかという、おにぎりとかとてんぷらとかき氷で100円です。子供はただで配りました。そんなことをやってきました。

私、次の夢があります。何でしょう。縦割りじゃない、何か横でつながるような、そんな何かできないかななんて大きな夢なんか抱いちゃっていますが、当然、一番最初にやらなきゃならないことは、12月25

日、大家族のクリスマスです。これで、これはベトナムの学生が持ってきた鶏肉とパイナップル。これをみんなで食べようと思っています。これからどうなっていくのかな。次は11月27日、良かったら見に来てください。私たちのチームは、ごちゃませnowです。ごちゃませnow。

はい、御清聴ありがとうございました。

(拍手)

司会：大家族ふるさと食堂、黒江さん、それから小林さん、ありがとうございました。

それでは、ここで本格的な取組を行っている3団体から発表いただきました。一旦、市長から3団体の取組に対する感想など、一言、コメントをいただければと思います。よろしく願いいたします。

市長：素晴らしい発表、3団体の皆さん、ありがとうございました。

皆さん、聞いていただいたとおり、どれも違う形態でやっておられる。対象も違う。子供たちを中心とするところもあるし、いやいや、もう全部というところもあるし、あるいはみんなそれぞれ成り立ちが違うというところで、地域の実情に合ったやり方を自分なりにやっているところがどれも本当に素晴らしい。何か一つが正解ということではなくて、どれも何か正解な感じ、しますよね。そういった意味で、本当に、私も二つ見させていただいて、いい地域の居場所になっているなどというふうな感じがいたしました。

特に今黒江さんから話があったみたいに、食べることってすごく楽しいから、何セミナー来てとか、相談乗るよというふうに言っても、なかなか人は来ない。だけど、ご飯と一緒に食べようというとか何か来るといふ、何かそういう食べ物独特な、食べ物のパワーって、ひきつけるパワーってすごいなど。だから、気軽に入ってくる。そういった意味での食べ物をツールにして居場所をつくるというやり方というのは、本当に有効だなというふうに思いますね。

その中で、いろんな課題が地域の中にあるんだろうけども、それを発見するきっかけになる、集うことによって。そのきっかけが、つかんだ課題というふうなのか、そこからどう展開していくのかというのがすごく大事なことなんじゃないかと思うんですけども、どうですかね。

例えば桜本さんのところでやっている、子供たちのいろんな課題が出てきますよね。こういった課題が、どこか相談窓口につないだりとか、あるいは支援が必要だなというふうなところに何となくつなげているような感じってしますか。

鈴木さん：かなりしますね。

市長：かなりしますか。ちょっとお話、いいですか。

鈴木さん：そうですね。やはりいろんな子供の課題ってやっぱりありますね。ただ、やっぱり僕が大きかったのは、川崎の地域みまもり支援センターですね、そういったところでいろんな方との連携で、特に区役所との連携で、一緒になって子供、家族を地域で支えるということができるようになっているなどというふうに感じています。

市長：ありがとうございます。

どうですか、江良さんのところも、もともとここでもいろんな相談を聞いていただいていると思うんですけども。

江良さん：開所しまして、当初、半年ですね、例えば100人御相談を受けた中で、85人がやっぱり子供関係の御相談でした。幼児に関しましては、やっぱり言葉がなかなか出てこない、集団の遊びが出てこない。小学校、中学校になってくるとやっぱりいじめの問題が出てきたりということと、あとは、やはりなかなか十分に養育されていないというところで、虐待、ネグレクトの課題というのもありましたし、そんなことも、ちょうどタイミングのよい時期に地域みまもり支援センターができたというところで、本当に田島支所なんかがお隣にあるので、何かあれば御相談をしながらということとやってこさせていただいたことが、非常にタイミングがよかったのかなというふうに思っております。

市長：ありがとうございます。

さっきのプレゼンテーションでもありましたけど、寺子屋のところでやっていただいていたら、その寺子屋の中からご飯を食べていない子がいるんじゃないかというふうなのを発見して、そこからまた展開していったという形で、何か気づきが気づきを生んで、そしていろんな人と多くを巻き込んでいく。本当にいろんな方たち、どの3団体ともしっかり巻き込んでいるなという感じがしました。これから始められるであろう方たちも、どれもいいものをつまみ食いしていただいて、やっていただくか、いい好事例の発表になったんじゃないかなというふうに思います。

また後ほどディスカッションさせていただきたいと思います。ありがとうございました。

司会：市長、ありがとうございました。

<取組紹介>

司会：さて、これからは、これから本格的な活動を始めようと取り組んでいる2団体から、簡単に現在の取組状況を発表していただきます。

初めに、大師第1地区社会福祉協議会の取組です。

会長の青山様、少年福祉部の清水様、前のほうによりしくお願いいたします。

青山さん：皆さん、こんばんは。大師第1地区の社会福祉協議会の会長の青山でございます。

大師地区についてですが、私と青少年福祉部の清水より発表させていただきますけど、非常に、今3団体のお話を聞いていまして、正直申し上げまして萎縮しております。これはとんでもないものに首を突っ込んだなというような感じでございますが、それでも今青少年福祉部の清水が一生懸命やっておりますので、何とかなるんじゃないかなというふうな感じはしておりますが、まずは私から大師第1地区を簡単に紹介させていただきます。

エリアは大師駅前、それから川中島、伊勢町、藤崎でございます。大師駅前のあとに、本当は大師中町も入っているんです。行政の関係でいきますと、大師駅前一・二丁目ということで、いつもこういったような場では大師駅前という名前しか出ておりませんが、大師中町、伝統ある町会でございますので、皆さん、どうぞひとつお忘れなく、よろしくどうぞ、お願いいたします。

人口は約2万1,000人でございまして、2万1,000人おりますが、そのうち高齢者は5,000人強ということでございます。といいますと、非常に川崎区の高齢化率から比べますと非常に高く、25%、4人に1人というようなことでございますけども、非常に高齢者が多いということは、それだけ地元で長くお暮らしの方が多くというように私は判断しております、非常に心強く思っております。

また、大師駅前などでは、大きなマンションが、結構建設が進んでおります。皆さん、お分かりいただけるかどうか分かりませんが、イトーヨーカ堂さんの港町店ですか、その前、ちょっとど忘れいたしましたけど、その土地を全部開放いたしまして、今、大きな建物が幾つも建っております。そういったようなこ

とで、今後も子育ての世帯ですか、そういったような方の転入も見込まれているんじゃないかと思っております。

大師地区は、とにかく今子どもが特に重点を置いておりましたのは、高齢者のひきこもり防止。これを目指して情報共有の仕組みですか、そういったようなものをつくるということで一生懸命でございますけど、若い世代に関しまして、皆さんに福祉の関心を持っていただくために、地元の小学校の福祉体験学習、こういったものに協力させていただいております。様々な福祉活動に取り組んでおりますが、こうした中で、今回、これからのテーマでございますこども食堂の取組、これも先ほど申しましたように3団体が非常に活発といいますか、実のある活動をしておりますので、これからはどうかという感じがしていますけども、これをきっかけに取組、内容については青少年福祉部の清水さんがいろいろと勉強させていただいておりますけども、どの程度勉強をしているか、ちょっと私もまだ聞いておりませんので、この場でひとつ発表していただいて、また得るところがあれば、3団体の皆さんに御指導いただければと思っております。

では、ひとつ清水さん、よろしくお願いいたします。

清水さん：こんばんは。何の特技もありませんので、ごく普通に進めさせていただきます。すみません。

にこにこだるまさんと名づけた大師第1地区のこども食堂の取組をこれからちょっと発表させていただきます。

まず、この取組を始めようとしたきっかけですが、3年前に、大師地区では中学1年生の男の子が亡くなるというとても痛ましい事件がありました。強いショックを受けたと同時に、地域では様々なうわさが飛び交い、とても嫌な気持ちになりました。そこで、私たちは子供たちの安全や安心を守り、被害者も加害者も出さないために地域で何ができるのかなということを考えさせられました。現在は子供たちの居場所として、放課後のこ文とかわくわくとかありますが、そのときの子供の気分によっては、お友達関係だったり、規律、制御だったり、内気にとってはなじめず、また、公園でたむろしていると白い目で見られるということもあります。

そんな中で、地域ができることは、学校、家庭以外の、繁華街ではなく子供の安心できる居場所づくりではないかなというふうな視点で、青少年福祉部のテーマを「子どもの居場所を考えてみよう」ということに決め、今、できることとして、夢パークのような大きなものは作れないけれども、無理のないものとして、ちょっと一歩踏み込んでみて、「おいしい」「楽しい」「うれしい」で子供たちを誘引できるこども食堂をやってみないかということで取組をスタートしました。

どんなこども食堂にしようかといろいろと検討を進めていく中で、一つは地域の子供の誰もが参加できる居場所。ふだん関わりの少ない地域の大人と子供が交流できる機会にしたい、温かくておいしい食事を大勢で食べる楽しい思い出作りにしたいということで、こういうことを通して、何よりも家庭での会話が最も大事だと日ごろ私たちは思っていましたので、家庭での会話につながるように、こども食堂での準備であり調理、片づけへのチャレンジを通して、家事やお手伝いに興味を持ってもらい、そのことがきっかけで家庭での会話が広がって欲しいなということから企画を検討いたしました。

最初に行ったことですが、こども食堂をやってみたいという気持ちにはなったものの、何のノウハウも持ってなくスタートしましたので、今日も御参加しているてんとう虫ハウスさんを視察させていただき、例えば広報用のチラシをどんなものにすれば良いとか、効果的に地域へ周知するために、チラシはどこに配れば良いとか、また、カレーライスレシピなど、様々な面でのアドバイスをいただきました。

実は先ほどの「おいしい」「楽しい」「うれしい」という三つのキャッチフレーズですが、そのままてんとう虫ハウスさんのものを使わせていただきました。もう、やるに当たって、本当にそうだなというふうに思いました。それで、お尋ねしたときに使ってもいいですよという優しいお言葉をいただきましたので、素直に使わせていただきました。ありがとうございました。

試行実施ですが、試行のこども食堂は藤崎の町内会館で実施しまして、22人の小学生が参加しました。参加費は100円いただき、メニューはカレーライス、フルーツポンチ、かき氷としました。

内容ですが、まず最初にくじ引きでグループ決めを行いまして、手洗い後、タマネギやニンジンの皮むきを子供たちとし、食材の切り方を教えて、家庭でも作ってみようねというような声かけをしました。

実は、当初は一緒に作って一緒に食べる、一緒に片づけるということを計画したんですけども、夏の暑い盛りでしたので、衛生課のほうからは、大勢の手で調理をするのではなく、大人がしたほうがいいんじゃないですかというアドバイスをいただきましたので、この日は大人だけの調理になりました。

調理中ですね、子供たちは、椅子取りゲームやテーブルテニスなどで体も動かして、ちょうど喉の渴いたところでかき氷をしました。

かき氷を始めたんですけど、実はハプニングもありまして、機械が動かなくなってしまいまして、急遽、ベテランのおじさんに電話をしまして今すぐ来てということで、すぐおじさんは来てくれました。

お店屋さんのように、かき氷、メロンにしますか、イチゴにしますかと注文を一人一人に聞いたので、とても、何か夏のいい雰囲気で盛り上がったと思っております。そんな中でちょっと子供たちも打ち解けてきて、食事中、家庭での過ごし方や、どこで遊んでいるのか、誰と御飯食べるのというようなことが自然に会話をすることができました。

片づけはみんなで行き、その後も余った時間を、夏でするのでヨーヨー釣りなどをして遊びました。追いかけてっこをしたり、それぞれ子供たちが遊びを見つけて、本当に上から下まで大きな声を出してはしゃいでいました。これは町内会館を貸し切りにしたことで、子供たちが自由に遊ぶことができたのかなというふうに思っています。

大人と子供が一緒になって楽しむ夏休みのひとときとなりましたが、実際にしてみて、子供たちと地域の大人との顔が見える関係づくりのよい機会となり、子供たちの笑顔を見て、改めて必要な場所であるということを確認しました。

この後、当日の夜、それから2日後に参加したお母さまからお電話いただきまして、子供がとても楽しかったというふうに帰ってきました。またこのような機会を是非お願いしますといううれしい言葉をいただいて、ちょっと私たちは良かったねという気持ちになりました。

今後に向けてですが、まだ試行錯誤のうちにこにこだるまさんなんですけれども、来年の2月に、今回は小学生を対象にしましたので、中学生を対象として実施する予定でおります。対象者が中学生ということで、今回と違うので、企画の内容や呼びかけの仕方にも知恵を絞っています。どうしたら来てくれるのかなというところで、まだ決まってないんですが、来年度からは2回の試行実施の結果を踏まえまして、本格実施していきたいと思っています。

そして、その先ですが、今は大師第1地区だけでこにこだるまさんを行っておりますが、第2、第3、第4地区、全地区にこの活動が広がるといいなというふうに思っております。

そのためにネーミングも川崎大師を中心としたまちですので、「こにこだるまさん」というふうに付けました。

私たちは、参加する子供の気持ちになって、やるからにはいいものにしたいなという思いで取り組んでいきますので、今後もそのような形でいけたらなというふうに思っております。

御清聴ありがとうございました。

(拍手)

司会：青山会長、清水様、ありがとうございました。

それでは、続きまして、中央第2地区社会福祉協議会の取組です。

福祉部部長の渡邊様、それから、同じく福祉部の西尾様、どうぞよろしくお願いたします。

渡邊さん：すみません、座って発言させていただきます。

私どもは、川崎区中央第2地区社会福祉協議会、私は福祉部長の渡邊です。福祉部の取組について発表させていただきます。

近年の取組経過ですが、私が福祉部長に就任してから、こどもの食堂の取組に至る経過をお話させていただきます。

私は平成25年度に福祉部長に就任しましたが、ここにいる西尾さんに副部長をお願いしました。平成25年度は福祉部の皆さんと相談し、社会福祉協議会とは何かということを知り、区社協さんから学びました。

平成26年、27年度は、福祉施設の見学会と意見交換会を実施しました。

28年度は、超高齢化社会を迎える中で、認知症について恒春園地域包括支援センターから御指導いただきました。指導をいただいた中で、福祉部として学んだことをどのように生かすかとの話が出て、認知症を予防するお茶のカフェを開催することで意見はまとまり、名称を認知症カフェ「くるみクラブ」としました。

29年6月に無事、認知症カフェくるみクラブが立ち上がり、毎月第3水曜日に下並木町会館で実施しております。役員を除いて25名から30名の方に参加していただいております。

そして、いよいよ今年度ですが、認知症予防カフェはおおむね軌道に乗りました。私はもともと子供会や寺子屋事業に携わってきたこともあり、次は子供のための取組ということで、31年度のこども食堂立ち上げを目標に、他の食堂の視察やリハーサルを行い、つい1週間前に試行のこども食堂を実施したところで、「ゆったり、自分たちも楽しんで、焦らないで」をモットーに、31年度の本格立ち上げを目指しています。

こども食堂の会場ですが、地域には平成26年度にオープンしたふれあいプラザかわさきという施設がございます。この施設はおもしろい施設で、老人福祉センターやこども文化センターなどが同居している施設なのですが、老人福祉センターは9時から16時、地域交流センターは17時から21時とし、同一場所での時間を分けての諸施設を貸し出しているという施設でございます。

地域交流センターには料理室があって、大広間があって、さらに、こども文化センターも同居しているので、調理の間や食後に親が迎えに来るまでの間、子供たちがこ文で過ごしても良い、まさに、こども食堂にとって、うってつけの場所と思われました。

今日は、そちらにいる川崎区社会福祉協議会を通じて施設に相談したところ、地域交流センターとの共催事業にすることで、無償で利用できることになりました。会場の問題はこれでクリアできました。

次に、リハーサルですけれども、10月2日に社協役員のみでリハーサルを実施しました。牛丼とカレーライスをみんなで調理し試食しました。さらに、リハーサルの後には、10月24日の試行実施に向けて、広報、調理、運営などをメンバーみんなで打ち合わせをしました。

今回のリハーサル、お試し会ともに不足金については、中央第2地区社協の費用負担で実施することになりました。

目指すところは、我々が作って子供たちがお客様で来てもらうのではなく、調理実習という位置付けにし、子供にも調理を手伝っていただくという形にしたいと思っています。

地域交流センター、日進町こども文化センターにチラシの配布をお願いし、申込先をメールとしました。先着30名にしたところ、申し込みの結果は3名のみでした。これではしょうがないということで、川崎小学校に協力をいただき、学校の連絡箱を使用させていただき配布しました。申し込みは学校でポストを置いてありますので、そのポストに投函していただくこととし、先着30名で再募集したところ、26名になりました。

そして、いよいよ迎えた10月24日の試行実施ですが、風邪を引いた、熱が出たなど、実際の参加者は21名の小学生の参加となりました。参加費は100円、メニューはカレーライスとサラダです。

試行実施をしてみてよかったことは、区社協の方々には指導をしていただき、1年生にはタマネギの皮むき、2年生にはニンジン皮のむき、3年生はジャガイモの皮むき、4年生に肉を切ることと調理に参加していただいたことです。

反省点としては、作ることに集中し、テーブルの配置、盛りつけなど、役割分担が無決定のまま実施したことでばたばたしてしまいました。

区社協、恒春園、区役所などの方々に見学に来ていただきましたが、不慣れなため全く対応できませんでした。

最後に、今後に向けてということで、年度内にもう一回、試行実施して、来年度から本格実施に移行できればと思っています。

そして、1回目の試行実施では、地域交流センターという地域の資源を活用しましたが、2回目の試行実施では、小川町の頌和幼稚園から園の施設を使ってはどうですかという話をいただき、場所的資源として活用できないかと考えています。様々な場所で実施していくことで、一つには、地域にせっきく使える場所があるので活用していきたいと、それから、社協の取組を知ってもらいたいということをねらっています。

また今後は、参加費100円では大赤字だったので、寄附だとか、提供だとか、その辺も検討していかないといけないと思っています。

今後も地域の場所や人を活用して、私たちが楽しみながら、焦らずに、未来を担う子供たちの育ちを支えていきたいと思っています。

以上です。

(拍手)

司会：渡邊様、西尾様、ありがとうございました。

それでは、最後に、地区社会福祉協議会の活動を支援する立場で御参加していただいております、川崎区社会福祉協議会の濱名様から簡単にコメントをお願いいたします。

では、よろしく申し上げます。

濱名さん：川崎区社会福祉協議会の濱名と申します。よろしく申し上げます。

川崎区社会福祉協議会では、平成28年度頃から、地域の方からボランティア相談などで、こども食堂について関わってみたいという御相談ですとか、自分は主婦でずっと長年料理とかをやってきたので、何か料理なら手伝えるので、こども食堂に何か関わることはないかというような、そういう御相談が増えてきておりました。そういった相談があった際は、このてんとう虫ハウスさんですとか、桜本さんに御相談をさせていただくということがありまして、また、ボランティア相談委員会でも、今お話がありました地区社協さんからも、こども食堂に興味があるかというようなお話もいただく機会が増えておりました。

こういったところから、その相談が入る一方で、こども食堂は貧困な家庭の子供たちが行くところなのではないかですとか、何で親が子供に食事をつくらないのかとか、そういったお声をいただくことがありました。

こども食堂は貧困の家庭を対象にしているというところもあるんですが、その一方で、子供が1人でも安心して来ることができる食堂として運営されているところすとか、誰でも、子供でも高齢者でも障害者でも、どんな方でも来ていいというような形で運営されているこども食堂も地域にはあるということがありまして、是非、区民の皆様にも、そういったこども食堂の実情について広く知っていただきたいということがありまして、社協として、こども食堂について取り組んでいこうという話がありました。

そこで、平成29年度ですね、日には平成30年1月になるんですが、カルッツの場所をお借りして、

「つながる、広がる、まちの居場所づくり、こども食堂について知ろう」というタイトルで、講演会を開催いたしました。

この講演会には、大田区でこども食堂をされて、こども食堂の名づけ親とされている近藤さんに御登壇いただきまして、そのほか、横浜市や中原区、また川崎区としては、てんとう虫ハウスさんに活動発表をしていただきました。

こちらのこども食堂の講演会は初めての取組だったのですが、新聞社さんからも問い合わせをいただきまして、川崎区以外の横浜市や大田区から定員を超える118名の方に御参加をいただくことができまして、こども食堂について大変に関心が高いということが分かりました。

そういうことが29年度はございまして、今年度、30年度から第4期地域活動福祉計画、当会で策定しているものの中でも、区民の皆さんの関心が高まっているこども食堂について、理解を今後深めていくとともに、活動した人を支援することを、川崎区の区社協として積極的に取り組んでいこうというふうに、計画の中で盛り込ませていただきました。

また、今年度は地区社協さんのほうで2地区活動が始まりまして、そういったところも地区の担当のほうで少しお手伝いをさせていただいております。

また、今年度は2地区で始まったところから、ほかの地区の地区社協の方々からも、その2地区はどういうふうに活動しているのとか、どういう活動をやっているか、とても興味があるというようなお声もいただいております。

今後、これから地区社協の方も興味がある方には、ボランティアさんも興味がある方が多いということもありますので、区社協としても、こども食堂に子供の居場所づくりを考えながら事業を行っていきたいというふうに思っております。

また今日、活動をもやられている方、たくさんお集まりいただいておりますが、また、こういった形で情報交換ですとか、今後続けていくに当たっての情報交換等ができる場所を作れたらというふうに、区社協のほうでは考えております。

以上になります。ありがとうございました。

(拍手)

司会：濱名様、ありがとうございました。

それでは、ここからの時間は発表を踏まえ、市長の進行で全体の意見交換を行っていきます。多くの皆さんに発言をいただきたいと思っておりますので、1回当たりの発言が長くなり過ぎないように、御協力をお願いいたします。

それでは、ここからの進行は市長にお願いします。よろしくをお願いします。

<意見交換>

市長：ありがとうございました。

先ほども言ったんですけども、対象とする人たちはかなり幅広で、それぞれのこども食堂といっても、こども食堂ではなかったりとかということなんですけれども、ちょっと勝手な話をさせていただきますと、今、地域包括ケアシステムの取組というのを、皆さんの御協力のおかげでいろいろと進めさせていただいておりますけれども、行政としても、こういう人に是非外に出ていっていただきたい、あるいは、子供でも本当にひとりぼっちでいるとか、どこかの社会のどこかに関わってもらいたいと、それを引っ張り出したいと思っているんですけども、なかなかそういったところに行政としてリーチしていくというのは非常に難しい。

そういう中で、例えば支援が必要な人も、あるいは、そこまでではなかったとしても、ちょっと関わって

社会に関わって欲しい、地域の中で関わって欲しいというふうなところに、こども食堂というものがちゃんとターゲットにリーチできているかというところが、とても大きな課題かなと、チャレンジだというふうに思っているんですけども、3団体の、今、既にやっていただいているところ、てんとう虫ハウスさんなんかはもう本当に皆さん参考にされているというところですけども、改めて、どうですかね。必要な、こういう人にこそ、こども食堂に来てもらいたいんだよね、子供だけじゃなくて、高齢者の方でも独居で地域の中にかかわりをほとんど持っていない方も中にはいらっしゃる。そういう人たちに何とかこう地域の中に入ってもらえないかなというふうな、そういったツールにこども食堂というのはなり得ているというふうには思うんですけども、実際やっていただいているどうお感じになりますか。

どなたでも結構です。どなたでも結構ですけど、既にやられている6人の方で、ちょっと黒江さん、お願いします。

黒江さん：私たちは幅広くターゲットを見ているんですけど、言っていないかどうかという感じだけど、来ていますよね、中核な子は来ています。そういう独居の方も来ています。心に何かを持っている方も来ています。ただ、それをあえて出さないというか、私たちは。

だから、やれば、必ずやればいらっしゃるはずですよ。やっぱり、そういう人たちは居場所が欲しいし、ただ、一遍には来ません。やっぱり怖いし、石橋をたたいて、さっきもお話したんですけど、ここは自分に危険はないかなとか、本当に自分たちのことを考えてくれているのかなとか、絶対思って、何回かこう多分見てたりとかして、その後やっとなかという感じですよ。

市長：なるほど。実感としてあるということですね。

黒江さん：実感としてありますね。

市長：いかがですか。

鈴木さん。

鈴木さん：そうですね、こども食堂がかなりいろんなところの議論として、子供支援の現場なのか、子供を中心とした地域の居場所づくりなのか、地域のいろんな様々な人の交流、いわゆる、地域づくりなのかという、それがそれぞれのこども食堂での様々な点かなと思うんですけども、例えば、そういう本当に支援ニーズが必要な子供のケアをどうしていくのかということというのは、なかなかこども食堂単体だけでやっていくのは難しいと思うんですね。

ただ、私たちのほうは、例えば要保護児童対策地域協議会の個別支援会議とか、私もいろんな方のケースで関わらせていただくことがあるんですけど、そういった私たちが個別に関わっている子供を、全体の中に一緒に御飯を食べようよということで、僕たちと一緒に御飯を食べることによって、いや、何かもうそんな結構ですじゃなくて、お母さんたちも子供たちも肩の力を抜いて楽しくみんなと一緒に食べられるという、やっぱりそこら辺は地域包括ケアの中でのある意味の一つの仕組みづくりというところにもつながってくるのかなとは思っています。

市長：ありがとうございます。

島津さん：どうしても孤立してしまう方とかというのは地域の中ではいらっしゃると思います。でも、ちょっと最初のときは、私たち支援員、相談支援で関わっている御家庭なんかは、特にそうなんですけれども、

障害をお持ちを弟さんとの二人兄弟で生活をされていた方なんかは、弟さんを別の、お家では住めないというところで、別の場所での生活が始まって、お兄さん一人になって、やっぱり地域でどんどん孤立をされていてしまっていてというところで、でも、やっぱり人と関わりたいというお兄さんの気持ちはあるというところで、ちょっとこども食堂に誘ったところ、そこから職員とお兄さんとの話す場ができて、それが地域でちょっと道端で会ったときにお話をするというような形になっていくと、だんだん、だんだん、そのお兄さん自身の表情が変わってきていて、それがゆえに、こども食堂においてよと最初言っていたときは嫌だよとかと言っていたのが、だんだん自分から積極的に来るようになったというような経過がある方も、やっぱり中には私のほうではあるので、そういったような、ちょっと本当に顔が知れて、お互いが何気なく話せる場になっているのが、こども食堂なのかなというふうには思います。

市長：ありがとうございます。

今のそれぞれのコメントから、やっぱりこども食堂って全てに効く万能薬ではないけども、しかし、一つの大きなきっかけになっている、ひっかかりになっているというふうな感じしますね。島津さんからはすごくいい事例を出していただきました。

区長に、今までの、いきなり振ってあれですけど、どうですかね、川崎区という特徴も踏まえてですね。

区長：本当にいろんなパターンがあるんだなというのを、最後の区社協のコメントでもやっぱり感じましたし、料理一つにしても、やっぱり、桜本って多国籍のメニューがあったりして面白いと思います。本当にいろんな料理のメニューも含めて、いろんなパターンがあるなと思いました。

一つやっぱり気になったのが、先ほどやっぱり黒江さんが言われていた、問題核に直撃しないという話ですか。今は問題を抱えている、その核のある方が来られている、ここの部分が先ほど大師第1地区社協さんのお話では、結構直撃しそうな、していこうかというようなことも感じられたんですけども、その辺、中核といたしますか、その核となる人を、今度、中学生の方に次は試行していくということも含めて、どういうふうにその辺がアプローチをされて、来られた方に対する動きの、今段階ではどういうふうに考えておられるのかなというのは、ちょっとお聞きしたいなと思いました。

市長：これ本当にすごい、中学生をターゲットにというのは、ものすごくチャレンジで大変かなと思うんですけど、でも、青山会長が先ほど冒頭でね、プレゼンテーションのときに言われたように、大師の痛ましい事件のですね、中学生の事件で、みんな何となく関わっていたんだけど、しかし、でも、手からこぼしてしまったよねというふうなのがあって、もしかしたら、中学生のときにみんなが関わっていて、情報をキャッチして、そして、先ほどのコメントでもありましたけども、加害者でもない、被害者も出さないという両方のところに、そういう環境にしていくための一つのツールとして、こども食堂でさらに一番ちょっと難しそうだなという中学生のところにやっついこうという、すごいチャレンジだと思いますけれども、どういうふうに巻き込もうかと思われておりますか。

清水さん：今日は、皆さんに何かいい知恵があったら、ちょっとお借りしたいなと思っているんですが、居場所づくりということでこども食堂をしましたので、ちょっと本当の格のターゲットになる方って、実は、私、主任児童委員をしておりますので、地域でこの方はこうというのは大体は把握しているんですね。ですから、その方に届けたいと思ったら、そこにポスティングできるんです。学校の先生を通じてもお話はできるんですが、居場所づくりということをテーマにしましたので、そこには行かず、何もしないでどういったお子さんが来てくれるのかなということ、まず最初なので見たいというふうにみんなで考えまして、そうしたら、やっぱりその結果ですが、ほとんどがですね、22名のうちのほとんどが保育園上がりのお子さん

たちでした。ということは、共働きだったり、ひとり親家庭だったりするお家のお子さんなんですけど、ちょうど台風が来て、もしかしたら台風の状況によりましては早く帰すようなことになりますといったときに、お母さんから、それでは困るんです、何時まで預かってもらわなくちゃ困るんですとかというのもあるって、やっぱり夏休みにしましたので、ふだん学校のないところというのを、お母さんたち、とても気になっているのかなというふうにはちょっと感じたんですが。

小学生と中学生を一緒にするのは難しいよね、ただ、ご飯食べに来ませんでは来ないよねというところで、別にしようかなというふうには考えました。

本来は、中学生なのでお料理教室、例えば、2月にしますので、ひな祭りバージョンの巻きずしとかどうとかって、いろんな意見は出ましたんですが、それでは来ないだろうと。女の子、男の子両方に来てほしいので、ボランティアとして募ったらどうだろう。小学生のためのボランティアで、それで自分たちもそこに加わるというのだったら、ちょっと中学生のプライドも傷つけず、いいかなというふうにはちょっと今は思っているんですが、是非、皆さん、何かいい知恵があって、こうしたら中学生が来るんじゃないのということ。

実は、地域教育会議というのがありまして、その中にこども会議というのがあるんですね。今度、こども会議でちょっとアンケートをとらせていただくことになっていまして、ふだん、どういったところにいますか、どういう場所があったらいいですかとか、お家の中ではどこにいますかというようなことを含めて、聞いた結果でもまた変わるかもしれないのですが、今のところ、お手伝いしてと、お手伝いしてくれる人を募りますみたいな形が差しさわりのないのかなというふうには思っているんですが、ぜひ知りたいことがたくさん。

市長：それこそ、桜本さんのところは、先ほどスライドでもありましたけども、かなりお兄ちゃんというか、高校生の生徒さんを巻き込んでというふうな感じですけども、何かアドバイスをありましたら、是非。

金さん：アドバイスというものではないんですけど、桜本の地域で子供を集めるって実はとても難しいですよ。頭を抱えることだなと思うんですね。私たちが袖まくりをして、さあ、いらっしやいということをやって、じゃあ来るのかということが、現実的にはやっぱり難しいということで、こども食堂をやるときに、そのあたりを一番懸念されるんじゃないかなというのはあるんですね。

うちの場合は、100名を超えてきている中でも、やはり皆さんリピーターなんですね。100名が130名になっても、やっぱり顔は分かってくるんですね。通ってくるときに、この時間にこの子供が来ないのはどうしたんだろう。今日は、中学生が来るんですが、初めは中学生はなかなか来れなかったんですが、3年目に入って、小学校をした子供が中学生になって、中学生になって友達を誘ってくるということが今現象として起こっているんですね。そうやって、子供が子供を連れてくるんです。

どうということかというのと、やっぱり少しずつ、安心できるという子供たちの実感が得られているのかなと思います。それは日頃子供たちと接してくれている、そういう若者がいることだったりとか、あとは、地域の方がいることだったりとか。そういった子供たちが、実はある日、学校の先生に、うちのこども食堂見に来ないかって、子供が学校の先生を連れてきてくれて、先生と一緒に御飯を食べたというようなときもあったんですね。

なので、そうやって子供たちは誘い合わせて何気なく来るんですけれども、ここに来るといつものおばちゃんがいる、私も本当にもうこども食堂のおばちゃんになるんですけど、こうやって150とか、大人も合わせて180の人たちが地域で集まるということは、一体どういうことなんだろうと、何のニーズがあるんだろうというふうに思います。

そのときに私たちが個人でやっているこども食堂ではなく、本当はそれこそ地域包括ということが今うたわわれている中で、私は町内会で地域で、このこども食堂が守られていき、皆さんによって育まれていく、そ

して、皆さんが見守ってくださるということ、地域の中で一緒に協力をしていけるようなことをしていきたいなというふうに思っています。それがやっぱり、ここに集まっている子供たちがいることの実態があるからだなと思うので、継続していくこと、信用されていくこと、信頼されていくことで、子供たちが初めて、実はねという話ができていくことを待ちながら、次のニーズや課題にちゃんと向き合っていけるようなことを準備していきたいなというふうに思います。

市長：すてきなコメントありがとうございます。

あれ江良さんのところでしたっけ、高校生をボランティアで入れてというので、非常にさっき関わっている人たちを見ると、巻き込み方が物すごく多彩でお上手だなという感じしたんですけども、ちょっとアドバイスを、こういう人たちを入れたらいいんじゃないかとか。

江良さん：そうですね、やはり、集まってくる子供も兄弟が少なかったりしますし、高校生でもやっぱり下の兄弟がいなかったりすると、初めての体験なんですね。どう遊んでいいのかわからないのか、どう関わっていいのかわからないのか、子供って本当にすごいですね、力あって。10分遊べば、その子がどんな子かとお互いに分かるんですね。

あと、大事なものは、それなりに御家庭の中で、じゃあ役割をもって生活をしているかということ、なかなか洗濯にしても掃除にしても何にしても、なかなか担ってなかったりします。その役割を再構築することと、やはり、3人でいつも言っているんですけど、子供たちの自己肯定感をどう高めていこうかということ、それがやっぱりすごく大事で、当初始めたときに、子供たちは我々スタッフに寄ってくるんですよ。御飯食べながら30分職員に話をしますよ。周りに友達いるじゃないといっても、そうじゃないんですね。学校でもそうですし、家庭でもそうですし、なかなか大人が話をできる、聞いてくれる機会がない。お忙しかったりすることが一つありますので。

あとは、大きなお兄ちゃん、お姉ちゃん関係なくて、単純な遊びがやっぱりいいですね。鬼ごっこ、ドロ刑、ここはもう本当に来ると走り回って、雨が降っても走り回っていますけど、一緒に遊べるんですね。やっぱり、簡単なルールでわかるということがすごく大事ななと思っています。

あとは、自由さがどれくらいあるのかなということも、子供に選ばれる部分なのかなと、そういう意味では、非常にスペースもあったりするので、ここは助かっているところかなというふうに感じています。

市長：ありがとうございます。

いかがですか、今のコメント。もし、今のでコメントございましたら。

清水さん：本当にやってみて難しいです。ちょっと小学生26人の応募があったんですけども、当日20人になって、小学校にダイレクトに校長先生も連絡入れました。配らせてください、全家庭にということで、もうすぐ3日ぐらいの間で埋まってしまうので、20人の定員でしたんですけど。

中学生はこれ集まらなかったらどうしよう、生徒会の子も呼ぼうかしらみたいな裏技を考えていたりするんですけど、やっぱりちょっと何か公園とかで、地域にいるので知っている子がいるといろんな話をしてくれるんですね、家のこととか。だから、人数に関わらず、今おっしゃっていただいたように、私たちは聞く耳を持って、一人ずつ一人ずつ何か増やしていこうかなというちょっと思いました。

市長：そうですね。実は寺子屋の去年のアンケートでも、全市的なアンケートで、子供たちが寺子屋へ行って何が良かったかということで、ほぼ9割の子供が、親と先生以外の大人と初めてゆっくりお話ができたということにもものすごく喜びを感じていると。大人以上に子供たちが非常にそのことについて喜びを感じている

というのは、やっぱり、その中で今日寺子屋関係者の方も傍聴に来ておられますけども。

また、その中で出てきた言葉が、いるだけ支援というふうな話が出てきたんですね。別に何か教えてもらうとかということじゃなくて、ただそこにいて話を聞いてくれるだけで良かったんだと。寺子屋先生がもうちょっと何か教えなくちゃいけないのかなとかと書いていたんだけど、実は子供から教えられたのは、いるだけでいいんだと、それをすごく子供たちは求めていたということに気付かされたということですね、その寺子屋のフォーラムで聞いて、ああ、そうなんだ、私は初めて、その寺子屋をやりましたよと言っていたときは全く私は想像もしてなかったような、そういったことが生まれてくるというのは、ちょっと驚きだったし、そういう子供たちが求めているんだなというふうなのを、やっぱり先ほどの江良さんの話でもそうですし、みんなそんなことを感じているのではないかなと思いますね。

しかし、区社協のところで、カルッツでフォーラムやったらおよそ120名。それだけ多くの方がやっぱり、何かやっぱりやらないと、という少し危機感と、何ができるんだろうということに対する、すごく思いが、こんなに盛り上がっているのかというのは、ちょっと僕さっき聞いて驚きだったんですけど、どうですか。

濱名さん：そうですね、1月に初めて講演会をやったんで、どのぐらいの人が集まるかというのも、ちょっとこちらもどきどきしていたところだったんですが、やはり、もう本当に区外の方もたくさん来ていただきましたし、新聞を見てということで、本当に遠いところから来てくださる方もいらっしやって、これから活動してみたいという方も多くいらっしやいました。

あと、アンケート等を見ていると、とても子供の居場所というのは必要だということが分かったですとか、先ほどおっしゃっていたように、子供の話をしっかり聞く大人がいることの大切さが分かったというところ、あとは、シニアでもそういう居場所が必要というようなお話もありまして、子供も含めて、子供から大人までそういう地域の居場所というのが必要なんだなということを感じました。

市長：なるほど。ありがとうございました。

何かこの間、いろいろなところと聞いてきて、私は子供だけをやりたいということも食堂の発案者の方と、あるいは、いやいや、全世代でやるべきだというふうにこだわりを持っておられる方と、いろんな、一概にこども食堂というふうなことを言っても、なかなか皆さん思いがあるので、離れていたり、また新しく加わってきたりというふうな話があるというふうに聞きました。

ですから、何となく最初立ち上げられるときに、どういうコンセプトでここはやるんだよというのを、最初からある程度明確にしておく必要があるのかなというふうなことを、この間、感じさせていただきました。

それぞれ開催頻度というのが3週間に一遍だったり、1カ月に一遍だったりということなんですけども、なかなか1回やるのも大変な、例えば提供された食材も、いただく食材からメニューを考えなくちゃいけないかったり、あるいは時間軸が合わなかったりというので、いろいろ大変なところもあるんでしょうけれども、もう少し頻度を高めてほしいという声というふうなものはありますか。

江良さん：毎週という声がある。

市長：毎週という声がある。それは、声はあるけど、やっぱり運営上難しいという感じですか。

江良さん：本来的には子供だけではなくて、私どものほうは共生食堂ということでやっておりますけれども、当初の部分は冒頭で申し上げましたけど、28年の8月にやったときに、やはり少し子供に学習支援もしたいなという気持ちもあったものですので、今のところ、第1と第3にこども食堂をやしまして、11月から

は第2、第4の定例になったときに学習支援を入れていこうかなと。もし、そこで余力があれば、またカレーになってしまうと思うんですけども、そんなものでも提供できればいいかなというふうに考えていますので、基本的には、学習支援も含めた中では毎週やる形と、あと、これは田島支所さんのほうから御紹介をいただいた、男塾というのを昨年からはじめてきて、今年の4月から男の料理教室というのを毎月1回開催させていただいてまして、そこにはやはり男性高齢者、おひとり暮らしの方もおいでになります。こういったことが本当は少しずつコラボができればいいのかなということを考えて今はやっております。

そういう意味では、なるべく声には応えていきたいんですけども、本来業務が相談支援になってきますので、そればかりやっていると、うちの施設長ににらまれるもので……。失礼なことにもなりますので、そういう意味では、地域の方に本当に御協力いただきながら、そのサポートをもっといただければ、毎週定期的に開催はしたほうがいいというふうに考えております。

市長：ありがとうございます。

黒江さんのところは、今後こういう人を巻き込んだら、もうちょっと運営が楽かとか、あるいは、もうちょっと広がり出るかも、とかというような方たちっていますか、今やっています。

黒江さん：私は、この社会が結構ストレス社会というか、子供がおかしくなるのは、お母さんのストレスとか家庭が、要するに子供って親からの影響が多いから、お母さんが忙しくて、お家へ帰ってご飯つくるのを疲れちゃったとか、そういった意味で、やっぱりうちのふるさとメニューって、月、水、木、金、土とやっているふるさとメニューは、そういった意味のお母さんたちへのお手伝いで、忙しくて疲れちゃったら来てくれて、御飯食べて帰ってくださいと、子供は何人でも連れて来ていいですよということをやったんですけど。

今はやっぱり、お母さん、ちょうど真樹ちゃんが子育てしているんで、これからちょっとマイクを渡しますけど、お母さんたちの、お母さんって若いお母さんですね、まだ未就学児の、あとは小学生とかの、そういうお母さんたちをちょっと巻き込むのはいいのかなと思います。

例えば、忙しいんだけど、来てくれたお母さんに今度何食べたいとメニューを考えてもらうとか、何か一瞬仲間になっている、そんな気がします。

どうぞお母さん。

小林さん：私は、学区的にいうとこの辺なんです。長女が小学校1年生になったばかりで、下がまだ保育園なんですけれども、そうですね、今のうちの食堂に来ているのは、保育園児、幼稚園児とママさんが多いんですけど、なのでやっぱり親子連れがすごく多いんですね。

川崎の特徴だと思うんですけども、地元の方と、何か川崎って使い勝手がいいから、よく分からないけど住んじゃったみたいの方と、今はすごい入り混っているじゃないですか。そうしたときに、ママさんがすごい不安感を抱えているというか、ちょうど、今、保育園年長さんのママたちが何人か来ているんですけど、ここに来たら同じ学区のママ友ができた。来年1年生になるから安心だな、同じクラスになったらいいね、みたいな会話が生まれているんですね。

だから、知らないんですよ。地域の中で、どの子が同じ小学校の学区なのかというのを知らないことがまず不安で、将来はどうなっちゃうんだろう、まず不安。年金出るのかな、不安。育児できるのかな、不安。あれ、川崎に住んでいたら子供増えるかな、不安。みたいな、もう不安だらけ、それは多分、高齢者も同じなのかなと思うんですけど、何か現代人って未来が全部不安だらけみたいな感じなんですよ。

それを食堂に来ることで、先ほど、2団体の方も同じだと思うんですけど、コミュニケーションをとることで、それを発散できるというか、シェアできることによって解消して、また日常に帰るから、うまく回る

よということができているんだと思うんですけども、そういう意味で、そういう何かママさんたちが、自分たちもその食堂と一緒に作っている仲間なんだ、私も地域の一人なんだねという関わりが、顔の見える関係性って先ほども出ましたけれども、お客様として扱うのではなく、もうみんなが、地域みんなであって、500円出すけど、何か皿を下げたりとか、何か一緒に別の子供と遊んであげたりとか、もう何かそれこそごちゃまぜみたいな感じの関わり方ができればいいのかなと、それが黒江先生が作られたスライドの中に出ている人材育成という部分なのかなと思うんですけども。

黒江さん：生徒だったんです。私の教え子なんです。

小林さん：20年前にダンススクールに通っていたんですけど、そういう感じで……。

川崎のママさんって、なぜか地域活動を率先してやりたいという方がすごい多いなというイメージがあって、大学の学生さんがこども食堂の論文を書きに川崎を回っているんですという方が来たんです。何ですか、なぜ川崎なんですかといったら、川崎は地域活動がすごいので、川崎に行ったほうがいいよと言われたぐらい、なぜか、ママの地域活動もすごい活発。というのは、やっぱり将来とか子供に対して、分からないことがいっぱいあるという不安から来ているのかなというふうに思うので、そういうところを巻き込めたら一番いいのかなと思います。

市長：ママ世代も本当に課題が多くて、本当に虐待の件数も非常に毎年増えていっていますけど、そういったところというのは、育児不安だとか、ストレスだとかというのを、そこを緩和させてあげられるところというのが十分じゃないんだと思うんですよね。そういう形で、少しストレスと、ある意味、いろんなものを情報を共有できるような場というのが、食堂の持っている一つの機能かもしれませんね。ありがとうございます。

大分時間がなくなってきましたが、青山会長が最初、冒頭に大分萎縮しましたとかというふうなコメントを言われておりましたけども、今までのお話を聞いていて、いかがでしょうか。

青山さん：ますます自信がなくなりました。と申しますのは、地区社協としまして、高齢者に対する福祉活動、これは盛んに行っておりますんですけども、子供さんも中心としたことは非常におろそかにしております、というよりも、皆さんやっぱり委員の方が高齢でございますので、どうしても自分の身の回りからということですね、子供さんのことは二の次という大変失礼なんですけども、ということで、今までやってこなかったということで、たまたま、先ほど濱名さんのほうからのお話にもございました、カルッツで行いましたこども食堂の件ですか、これに清水さんなんかも参加していただきまして、いや、こういうことをやっていくんだけども、これは大変なことだよということで、とにかく進めてみようよということで、小学生のこにこだるまさんは即実行するという形で、全くまだ試行の形でございますけども、進めさせていただいたわけです。

今度は中学生ということでございますので、私も、中学生大丈夫なのかなというようなのは本音でございます。ところが、私ども第1地区の社会福祉協議会では、中学生との懇談会を何回か、もう16回ぐらいですかね、10回以上させていただいております。これは中学生と、それから地域の方々との要するに懇談会と申しますか、意見の交流会でございますけれども、こういうことをさせていただいたんですけども、悪いことに学校側から出てくる学生さん、いい子ばかりなんです。生徒会の会員だとかですね、生徒会長だとか、こういった方ばかりで、私たちが聞きたい本音はなかなか聞かせていただけないんですね。また、聞きたいという子供たちも出てきません。

じゃあ、今回こういったようなことで、こども食堂、これを機に清水さんのほうで、いろいろ今もお話を

聞きましたけれども、やはり声をかけ合ったりなんかして集めていただいて、そうすると、ある程度の声が、皆さんの声、悪い声も聞こえてきますので、私どもの地域としましても対応のいろいろな方法ができるんじゃないかというようなことで、これから応援していきたいと思うんですが。

ただ、地区社協の活動には拠点が無いんです。ということは場所が無いんです。今、3団体のお話を聞きますと、それぞれに拠点をお持ちでございまして、非常に厨房や何かもスライドを今見せていただいたところで、いいところばかり揃っておるんですけども、地区社協の場合は、特に第1なんですと、先ほど冒頭で御紹介させていただいたとおり、5町会、この町会の会館を持ち回りといいますか、順番に回って、それでいろいろと講演会とか、ワークショップとか、こういうものを開かせていただいておりますけど、決まっておらないんです。

いつか、市長も御足労いただいた藤崎のいこいの家、これも非常に上にこ文がございまして、子供さんとの交流、こういったようなことには十分力を入れているんですが、厨房もございまして。ここでは社協といえますか、第1民協が主体となりまして高齢者の給食会、これは月に1回開催させていただいたんですが、こういったようなところを使ってやっていけばいいのかなということで、たまたま今は藤崎の町内会館が厨房もしっかりしておりますので、清水さんが地元でございまして、そこを拠点としてやっておりますけども、これは決まった拠点をどこか一つ決めなきゃならないだろうというふうに考えておりますけど、なかなか難しく、先ほど言ったように、非常に難しい考え、これがちょっとできるのかなというような考えになっておると、これが現状でございました。

市長：ありがとうございます。

先ほど来、申し上げているように、どれも、これが正解というものが恐らくないので、それぞれの形をみんなで模索し合っていくということなんじゃないかなと思うんですね。

恐らく、中学生に今度ターゲットを当てたというのは、私の知る限りでは初めてなんじゃないかと思しますので、そのまた挑戦が次のまたいい好事例となって波及していくんじゃないかなというふうに思います。

ですから、濱名さんおっしゃったように、あれだけ多くの方々がカルツツに集まって、うちでもやってみようかなと関心を持っていただいているというのは、対象をどういう対象にするのかというのは、みんなばらばらで、どこでやるのかというもばらばらでというので、そういうのがいっぱい出てくると、どこかでそのかかわり合い、ひっきりというふうなのが出てくると、そういうのがたくさんできればたくさんできるほど、いいのではないかなというふうに感じさせていただきました。

是非、今日は、この3団体それぞれに違うアプローチで取組で、いい好事例を発表していただいたので、これがますます進化していくと、さらに、どんどん、どんどん、ほかの地域にも波及していくんじゃないかなと思っています。

今、川崎市内で、各区でどんどん、このこども食堂の取組が広がっていて、各区数カ所ずつはもう確実にあるという感じで、それが広がっていくという感じですから、是非、今日のような、こういうノウハウがあるよと、あるいは、食材提供してくれる、こういうところに頼めばいいんだよとかというふうな話をもっと共有化できると、もっとスタートしやすい、ハードルが下がっていくのではないかなと。社協の皆さんにも是非御協力をいただければなというふうに思っています。

最後、区長、まとめで。

区長：すみません。ちょっと面白いなと思ったのは、先ほど中央第2の渡邊さんのお話であった、楽しみながらやっているということはちょっと面白いなと思って、実はこども食堂って、その食べに来る人たちの居場所というだけでなく、それを支える人たちのひょっとしたら居場所づくりにもなっているのかなというふうな感じもして、それはそれで面白いなというふうに本当に思いました。

これから、川崎区内のいろんなところで、いろんな人たちのいろんな居場所がもっともってできていくと、本当にいいんだろうなというふうに今日は思いました。

今日は、こども食堂というテーマでしたけれども、その他のいろんなテーマで、いろんなまちの広場といえますか、居場所ができてくると、もっともって住みやすい地域になってくるんだなというふうに思いました。

本当に、今日はどうもありがとうございました。

(拍手)

市長：ありがとうございました。

もう時間ですので、これで閉めたいと思いますが、今日は本当に多くの皆さんに傍聴にも来ていただいて、ありがとうございました。是非、好事例をどんどん徹底的にパクって、どんどん広げていくというふうな形でお願いしたいなというふうに思います。

御協力いただきまして、ありがとうございました。

(拍手)

司会：以上をもちまして、第38回区民車座会議は終了いたします。

お帰りの際は、お手元の2種類のアンケートへの御協力をよろしく願いいたします。アンケート、それから、バインダー、バインダーに挟んである鉛筆、こちらについてはお帰りの際に係の者へお渡ししてください。

本日は、御参加いただきました参加団体の皆様、そして、御覧いただきました傍聴者の皆様、本当にありがとうございました。お忘れ物のないよう、気をつけてお帰りください。

これで本日の車座集会は終了でございます。本当にありがとうございました。